

【原 著】

中級後半および上級前半の学習者を対象とした
地域文化・産業を学ぶ日本語教育の試み

内丸 裕佳子

Establishing of a Local Study Program for Upper-intermediate
and Pre-advanced Japanese Learners

Yukako UCHIMARU

2013

岡山大学教師教育開発センター紀要 第3号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.3, March 2013

原 著

中級後半および上級前半の学習者を対象とした 地域文化・産業を学ぶ日本語教育の試み

内丸 裕佳子^{*1}

要旨:

本稿は中級後半および上級前半の日本語学習者を対象とした文化クラスでの実践報告である。日本刀、ジーンズ・学生服などの繊維産業、団扇と扇子、麺文化の比較と伝統製法のそうめん、B級グルメと地域の農産物・海産物、といった地域の文化・産業に根差したトピックをとりあげた。このクラスの特徴は、留学生だけでなく、副専攻日本語教育コースの学生と国際交流に興味を持つ日本人学生がボランティアとして授業に参加している点にある。協働学習およびプロジェクトワークが留学生にどのような刺激を与えたか、このような形式のクラスを運営する上での課題は何かをアンケート調査から明らかにする。

キーワード: 地域文化, 地域産業, プロジェクトワーク, 協働学習

※1 内丸 裕佳子 (岡山大学言語教育センター)

I. はじめに

筆者は留学生への日本語教育業務に加えて、2009年前期から2010年前期まで短期交換留学生受け入れ業務も担当してきた。この間、中村(2005)をもとにした交換留学プログラムに関するアンケート調査を行い、計34名から回答を得た。岡山大学を選んだ理由(複数選択可)で「大阪や東京のような大都会よりも小さめの都市の方が語学の勉強に適している」を選んだ学生が19名(55.6%)、当大学での日本文化に関する学習の重要性を問う質問についても、5段階評価で5(非常に重要)を選んだ学生が19名(55.6%)、4を選んだ学生が10名(29.4%)おり、日本語を使用する環境に身を置き、地方の生活の中で日本文化に接することを望んでいる姿が窺えた。そこで、日本語教育の一環として中級後半および上級前半の学習者を対象に、プロジェクトワークを通して地域の文化・産業を学ぶ授業を開講した。このクラスの特徴は、留学生だけでなく、副専攻日本語教育コースの学生と、国際交流に興味を持つ日本人学生がボランティアとして授業に参加している点にある。協働学習およびプロジェクトワークが留学生にどのような刺激を与えたか、このような形式のクラスを運営する上での課題は何かをアンケート調査から明らかにする。

II. 授業概要

クラスは留学生8名、副専攻日本語教育コースの学生5名、ボランティアの日本人学生4名の参加で始まり、90分の授業を15回行った。授業内容を【表1】に記す。

【表1 授業内容】

	授業内容
1	オリエンテーション ワークシートをもとに岡山の特徴を皆で話し合う。留学生が作った壁新聞の例を見て、自分ならどのように岡山を紹介するか考える。 (課題: 観光案内所や物産店に行き興味を持ったものの写真を撮ったり、インターネットで調べたりする。)
2	岡山の特徴を発見しよう 1回目ではわからなかった点や興味を持った点について各自で調べてきたことを発表する。
3	日本刀について(長船) 各国の刀剣を写真をもとに比較する。刀作りと精神性との関係、伝統工芸品を継承する活動について考える。
4	ジーンズについて(児島の繊維産業) 繊維産業発達の歴史と地域の特色について考える。藍染、機織りについて動画をもとに学ぶ。
5	撫川うちわについて(庭瀬) うちわと扇子の違いを写真をもとに観察する。各国のうちわと扇子を比較する。後楽園で行われている投扇興や県内での紙漉きを紹介する。伝統工芸品の衰退に関して考察を行う。

6	そうめんについて（鴨方） 麺文化の波及について歴史との関連から考察する。各国の麺文化を比較する。各国の麺料理を紹介する。
7	B級グルメ・岡山の果物について 地元食材を活かした町おこしについて考察する。
8	予約・依頼の仕方、礼状の書き方を学ぶ。
9	効果的な新聞作りについて考える。
10～14	壁新聞作り／発表準備
15	発表／壁新聞の掲示作業

第3～7回目の授業では、岡山県を代表する産業および文化を1回ずつ取り上げた。第3～7回目の教材は、2011年度前期に副専攻日本語教育コースの学生が作成した教材をもとにしている。以下、教材と授業について、①教材および授業で必ず取り入れたこと、②教材作成上の留意点、③授業の進め方の3点について述べる。

1. 教材および授業で取り入れたこと

教材および授業で必ず取り入れるようにしたのは、①受講生の理解を助ける視聴覚教材（画像・動画・パワーポイントによる説明）、②受講生が「読む、書く、聞く、話す」の4技能を使うタスク、③個人の興味と結びつけるための自国文化・産業との比較を行う問いかけ、④受講生が協働で作業をするタスクの4点である。

これらは、受講生の日本語使用を現実のコミュニケーションに近づけるために必要な要素だといえる。この授業は、日本語を外国語として学ぶ留学生のための日本語科目の一つとして開講している。言語学習の面から授業を捉えると、プロジェクトワークおよび受講生全体での協働学習は、現実社会で通用するコミュニケーション能力を養うことをその主な目的とする。プロジェクトワーク形式による言語学習の利点として、①生の日本語に触れられること、②より現実的なコミュニケーションストラテジーが養えること、③自身の日本語力が実感できること、④学習者主導の活動であることの4点が挙げられる（バルダン他（1988））。これら4点について、具体的に説明すると以下ようになる。文型・語彙を中心とした言語学習では、教室内で学習する日本語と現実生活での日本語とがかけ離れてしまう面がある。受講生が興味・関心を持つ話題や内容で生教材を提供し、それについて受講生同士が協働で課題に取り組む授業形式において、言語は手段として用いられ、そこでの日本語のやりとりはより現実的なコミュニケー

ションに近づくといえる。例えば、意味がわからない時は、適切な聞き返しのストラテジーを用いる必要があり、意見を述べる時には、わかりやすく伝えるストラテジーが駆使される。そこでの活動を通して、受講生は自身の日本語力を実感すると同時に、コミュニケーションを成立させるために必要なスキルや自身の課題に気づく機会も得る⁽¹⁾。コミュニケーションで大切なのは、相手と良好な関係を築きつつ個人がいかにかその行動目的を達成できるかである（ヨーロッパ日本語教師会・独立行政法人国際交流基金（2005）、吉島・大橋（2004））。人間は自身の行動目的の遂行のために言語を用いる。この授業において、受講生は興味・関心を持つ話題・内容について理解を深めるといふ行動目的の遂行のため、互いに助け合い、適切なコミュニケーションを図る。プロジェクトワークおよび協働学習による授業は、より現実的な言語使用を学ぶ機会を提供しているといえる。

視聴覚教材を取り入れたのは、受講生の興味・関心を引くための手段でもあるが、難解な語彙・表現の理解補助としての役割も担う。視聴覚教材に対する興味・関心がきっかけとなり、受講生同士の話題が広がることもある。

自国文化・産業との比較を行う問いかけを取り入れたのは、問題をより身近に感じさせるためである。

「読む、書く、聞く、話す」の4技能を使うタスクを取り入れたのは、資料を読んだり、受講生同士で話し合ったり、意見に耳を傾けたり、必要な部分をメモに書き記したりする活動を通して問題意識を深め、現実的なコミュニケーション能力に近づけるためである。

2. 教材作成上の留意点

受講生の日本語のレベルを中級後半から上級に設定したが、授業で提供される資料の語彙や表現が難しすぎると、学習に支障をきたす。授業では基本的に生教材の配布を心がけたが、教材作成にあたり次の3点に留意した。①日本語能力試験N2（旧2級）レベルの語彙・表現を中心とすること、②漢字にすべてルビをふること、③わかりにくい、あるいは説明しにくい語彙や表現がある場合は、図や写真などを入れて理解を助けるようにすること。

さらに、授業の理解を深め、受講生が壁新聞を作成する際、テーマ選びの参考になるように、教材の冒頭に「今日のキーワード」をつけた。

第3～7回目の授業の教材は、2011年度前期に副

専攻日本語教育コース生を対象に筆者が担当した「日本語技能別指導法」でのプロジェクトワーク教材作成課題がベースになっている。2011年度および2012年度の「日本語技能別指導法」で副専攻日本語教育コース生が取り上げたテーマをまとめたのが【表2】である。受講生は岡山県出身者が多く、教材作成を通して、県内および県外出身者が共に気づきを得ていた。筆者にとっても歴史、文化、習慣等学ぶことが多く、今後もこの活動を続け、留学生向けの授業のテーマを増やすことにつなげたい。

【表2 プロジェクトワーク作成課題のトピック】

2011年度前期	2012年度前期
日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、農産物、備前焼、山田養蜂場 (1人1トピック)	桃太郎伝説巡り、岡山の建築物(木造校舎を中心に)、日本酒と醸造所 (2~3人で1トピック)

3. 授業の進め方

第3～7回目の岡山県を代表する産業および文化を学ぶ授業では、次の手順で学習を進めた。

- ①画像、動画、パワーポイントを用いて岡山県の産業および文化の概要を教師が10～15分程度で紹介する。
- ②読解資料、図・写真・漫画等の視覚的な資料を与え、3～4人のグループで話し合いながら、適宜必要事項をワークシートに記入し、理解を深める。
- ③②の活動で興味を持った点・疑問に思った点を小グループで話し合う。
- ④③の活動を受講生全員で共有する。
- ⑤授業内容の確認とまとめを行う。

⑤のまとめにおいて、③④の活動で気づいたことを学習者に毎回記録させ、壁新聞のトピック探しのヒントになるように心がけた。

第3～7回目の教材作成に従事した副専攻日本語教育コースの学生もボランティアとして授業に参加し、他の学生からの質問に対し、補足説明を行うこともあった。

第8回目以降の活動は、第7回目までの授業内容を参考にしながら、受講生が日本人学生および留学生に「岡山の面白さ」を伝える壁新聞を作る作業が中心となった。留学生は各自でテーマを決め、クラス内の日本人学生の協力を得て、必要に応じて学外の講座を

受講したり、インタビュー調査を行ったりしながら、壁新聞作成に取り組んだ。作成した新聞は大学のオープンキャンパス開催日に合わせて、国際センター掲示板、日本語コース掲示板、イングリッシュカフェ、学内3か所の食堂、図書館入口の7か所に掲示した。

受講生が作成した壁新聞の内容は【表3】のとおりである。

【表3 壁新聞の内容】

	出身国	壁新聞の内容
1	アメリカ	「きれいな歴史の岡山を楽しもう！」高梁市の名所・名物の紹介、観光おすすめルートの紹介
2	アメリカ	「岡山弁を勉強しよ～や～」岡山弁のQ&A、語彙と文法の紹介、上記をもとにした岡山弁クイズ
3	トルコ	「日本刀 vs トルコの刀」両者の紹介、日本刀の作り方の紹介、日本での伝統を受け継ぐ力の紹介
4	ロシア	「後楽園」1年間のイベント紹介

留学生8名のうち、最終的に壁新聞まで作成できたのは4名だった^⑩。4名は教室外でも積極的に調査活動を行っていた。【表3】1のアメリカ人学生は、日本人学生とよく旅行に出かけており、壁新聞の内容は旅行に対する関心が反映されている。【表3】2のアメリカ人学生も新聞作成にあたり、岡山県出身者にインタビューを行ったり、協力を得たりして積極的に壁新聞を作成していた。【表3】3のトルコ人学生は、母国でも日本でも剣道を習っており、第3回目の授業で紹介した日本刀に興味を持ち、備前岡山日本刀傳習所による学外の公開講座にも参加している。【表3】4のロシア人学生は日本文化に興味を持っており、第5回目の授業で取り上げた後楽園での投扇興の紹介から、後楽園のイベントについて調べ、後楽園が主催する「和の学校」にも参加している。授業活動がきっかけとなって岡山について積極的に学んでいたといえる。

Ⅲ. アンケート調査の結果と分析

プロジェクトワーク、および日本人学生との協働学習が受講生にどのような刺激を与えたか、このような形式のクラスを運営する上での課題は何かを明らかにするため、アンケート調査を行った。アンケート調査用紙は留学生向け、日本人学生向けの2種類作成した。

1. 調査内容

主な調査内容は以下の4点である。

- ①授業内容に対する評価（第3～7回目の授業内容／第8回目以降の授業内容）
- ②授業形式に対する評価（1回完結紹介型の授業回数に対する評価／協働学習に対する評価）
- ③教室活動の負担（動画視聴／資料読解／日本語での話し合い／壁新聞作成）
- ④岡山に対する興味・関心・理解

アンケート調査の質問は以下のとおりである。1.～21.の質問は留学生、日本人学生双方に行ったものである。22.～25.は留学生のみへの質問、26.～28.は日本人学生のみへの質問である。回答については、質問1.は「はい・いいえ」の2択形式、質問2.～9.と質問11.～19.と質問22.～28.は5段階評価形式、質問10.は回答選択形式（複数回答可）、質問20.～21.は自由記述形式をとった。5段階評価において、5は「強く思う」、3は「ふつう」、1は「思わない」とした。留学生6名、日本人学生6名の回答を得た³⁾。

<留学生・日本人学生共通の質問>

1. プロジェクトワークのクラスは初めてだった。
2. 日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、果物のプロジェクトは面白かった。
3. 日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、果物のプロジェクトで見た動画は参考になった。
4. 日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、果物のプロジェクトで、日本語の資料を読むのは大変だった。
5. 日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、果物のプロジェクトで、日本語で話す（日本人学生向けの質問：留学生と日本語で話す）のは大変だった。
6. 日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、果物のプロジェクトで、日本語で聞く（日本人学生向けの質問：留学生の日本語を聞く）のは大変だった。
7. 日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、果物のプロジェクトで、日本人のボランティアと（日本人学生向けの質問：留学生と）話したり、考えたりするのはおもしろかった。
8. 日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、果物以外にも、岡山を知るための1回ず

つのプロジェクトを増やした方がいいと思う。

9. 日本刀、ジーンズ、撫川うちわ、そうめん、B級グルメ、果物のプロジェクトを通して、授業を受ける前より、岡山に対してもっと興味を持つようになった。
10. 1回ずつのプロジェクトで、どんな内容のものがあったらいいと思いますか。（複数回答可）
 - ①祭り
 - ②建物
 - ③岡山の歴史的に有名な人物
 - ④岡山の工場
 - ⑤日本酒
 - ⑥みそ・しょうゆなどの日本的な食べ物
 - ⑦伝統行事
 - ⑧その他
11. 新聞作りを通して、岡山に対する興味が強くなった。
12. 他の学生の新聞も見て、岡山についてもっと学習できたと思う。
13. 新聞作りはよかったと思う。
14. この授業を通して、岡山に対する理解が深まったと思う。
15. この授業ではもっと日本人の学生がいた方がいいと思う。
16. 日本人の学生といっしょに考えたり、話し合ったりする授業にした方がいいと思う。
17. 日本人の学生といっしょに新聞を作る授業にした方がいいと思う。
18. この授業でみんなで楽しく話し合ったり、考えたりすることができたと思う。
19. このような文化のクラスがあった方がいいと思う。
20. このクラスをよくするために、どんなことをしたらいいと思いますか。（ハンドアウト、授業の進め方、内容など）
21. この授業に関する感想をお願いします。

<留学生のみへの質問>

22. 新聞作りのためのテーマを選ぶのは大変だった。
23. 新聞作りのために、日本人のボランティアの人が助けてくれてよかった。
24. 新聞作りで、日本語をたくさん使わなければならないと感じた。
25. 新聞作りで、日本語をたくさん使って勉強になった。

<日本人学生のみへの質問>

26. 新聞作りの協力は大変だった。
 27. 新聞作りで留学生といろいろ話し合うことができ
 て勉強になった。
 28. 日本人の学生も単位が取れるクラスにした方がい
 いと思う。

【表4】は上記の質問2.～9., 質問11.～19., 質
 問22.～25., 質問26.～28.の5段階評価の平均を
 まとめたものである。

【表4 留学生・日本人学生の評価の平均】

	質問番号								
	2	3	4	5	6	7	8	9	
留学生	4.5	4.3	3.2	3.0	2.7	4.3	3.8	4.7	
日本人	4.6	4.8	2.0	1.4	1.6	5.0	3.8	4.4	

	質問番号									
	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
留学生	4.4	4.4	4.0	4.5	4.0	4.7	4.0	4.7	4.8	
日本人	4.4	4.3	4.8	4.6	4.0	4.3	4.2	4.6	4.7	

	質問番号			
	22	23	24	25
留学生	3.3	4.7	3.8	4.3

	質問番号		
	26	27	28
日本人	2.4	4.3	3.8

授業内容については質問2., 3., 9.の結果と質問
 11.～14.の結果を見ると、留学生、日本人学生の双
 方から高評価を得たといえる。質問11.～14.の回答
 は第8回目以降の壁新聞作成に対する授業評価であ
 る。質問11.～14.は、この活動に取り組んだ学生
 のみが回答している。壁新聞作成に積極的に取り組ん
 だ結果が反映されているといえるが、半分の受講生
 があきらめてしまったことを考慮すると、改善が必
 要である。この点についてはⅢ-2.節で述べる。

質問8.の結果を見ると、平均値が留学生、日本人
 学生ともに3.8であり、第3～7回目のような1回完
 結紹介型の授業を増やすことに対し積極的に賛成し

ているわけではない。留学生の回答者6名のうち4名
 が積極的に壁新聞作成に取り組み、質問11.～14.
 に対し高評価を与えていることから、壁新聞作成の時間
 を含めると、1回完結紹介型の授業回数は彼等にとっ
 ては妥当なものだったのかもしれない。しかし、壁
 新聞作成を途中であきらめてしまった学生が半数も
 いたことを考えると、壁新聞作成よりも実行しやす
 い課題に変え、第3～7回目に行ったような1回完
 結紹介型の授業を増やす必要があるといえる。1回
 完結紹介型の授業を増やす場合、今後取り上げるべ
 きトピックとして以下が質問10.の回答に挙げられて
 いた。季節の伝統行事、代表的な祭り、日本酒・味噌・
 醤油など伝統的な製法で作られた食品、歴史的に有名
 な人物の紹介、電気自動車・ビールなどの工場の紹介、
 方言（他地域との比較）。

協働学習については、質問7., 16., 18., 19.の結果
 から、留学生と日本人学生の双方が日本語を介してさ
 まざまな気づきを得て楽しく学ぶことできたことが
 窺える。質問23., 25.から留学生にとって、日本人学
 生のサポートは心強いものであったといえる。また、
 留学生にとって、日本人学生や他の留学生との話し
 合いが岡山の文化・産業に対する興味・関心を高め、
 自国の文化・産業に対する理解の深化や地域の人々
 との交流にもつながっていたようである。日本人学生
 も各国の文化・産業の比較を通して留学生から学
 んだり、他の日本人の意見を聞くことでさまざまな
 物の見方に気づいたりすることがあり、「教える」と
 いう一方的な立場ではなかったといえる。この点に
 ついては、Ⅲ-3.節で述べる。

次に授業活動の負担について見る。質問4.～6.
 の結果から、写真・動画資料、パワーポイントによる
 概要紹介、資料の読解作業、話し合いの作業での日
 本語使用は、留学生、日本人学生にとって大きな負
 担になっていなかったことがわかる。質問22.の結果
 から、壁新聞を作成した学生にとってはテーマ選
 びもそれほど困難ではなかったといえるが、受講生
 の半数が壁新聞作成をあきらめたことを考慮すると、
 壁新聞作成という活動形式を変えることが必要だ
 といえる。

質問番号28.の平均値は3.8だが、これは学部在学
 生（2名）と社会人学生（4名）の間で差が見られる。
 前者2名は単位化を望んでいる。より多くの日本人
 学生の参加を目指す場合、単位化について検討して
 いかねばならない。

2. 壁新聞作成について

テーマの選択から新聞作成まですべて日本語で行うため、留学生にとって負担が大きい作業だったといえる。大学院生、研究生は壁新聞作成の段階で授業をやめてしまった。授業後のアンケート調査では、留学生、日本人学生ともに、新聞作りを通して岡山に対してさらに興味を持つようになったと答えているが、留学生の負担を考慮すると改善が必要である。壁新聞作成ではなく、岡山の文化・産業で興味・関心を持ったことについて現地へ行って写真や動画を撮らせ、それに簡単なコメントを付けてホームページに掲載するといった方法も考えられる⁴⁾。

3. 協働学習について

自由記述回答と筆者に直接語ってくれたことをまとめると以下ようになる。協働学習を通じてさまざまな気づきがあり、それが学習に対する積極的な取り組みにつながっていたといえる。どちらか一方が教え、学ぶという力関係ではなかったこと、留学生対日本人学生という関係だけでなく、留学生同士、日本人学生同士で学び合うこともあったことが窺える。

<留学生の意見>

- ①日本人と一緒に勉強できて良かった。このような機会がもっと増えると良い。
- ②地元の人が多かったので、岡山について深く知ることができた。
- ③年配の人も若い人もいて、いろいろな経験が聞けて良かった。

<日本人学生の意見>

- ①岡山県人以外の日本人も授業そのものが勉強になったと思う。
- ②留学生と協力して一つのものを作っていくことを楽しめた。
- ③この授業をきっかけに、自分でもインターネットで調べるようになり、今まで知らなかった岡山について知ることができた。
- ④なかなか留学生と接する機会がないので、15回通してずっと接することができたのは良かった。色々な留学生と接して、「アメリカ人だからこうだ」ではなく、アメリカ人にもさまざまなタイプがいることがわかった。もっと留学生と交流できる機会があればいいと思う。

上記以外の授業に関する感想も以下に記す。

<留学生の意見(原文ママ)>

- ①岡山についてすごいふかく、色々なことについて知りことができ、よかったです。
- ②日本の文化に興味は深くになっています。
- ③とったよかった。日本人といっしに勉強する授業(日本語を話す授業)をこの留学ではもっとたりたかったけど、岡大ではなかった。
- ④ならったことについては興味を持つようになったことがよかった(くわしく、深く)。

<日本人学生の意見>

- ①よく準備されていて内容は興味深く、充分楽しく参加できた。
- ②他県出身学生にとっても面白い内容なので、もっと日本人とグループを作って進めるようにしてもいいのではないかと思います。

4. 改善点

自由回答記述には以下の記述があった。

<留学生の意見(原文ママ)>

- ①ハンドアウトはよかったけど、サイズが大きすぎると思いました。ふつうのサイズの方がいいです。
- ②1限目じゃない方がいい。/時間は早すぎ。
- ③漢字が大変だった(書くのが)。
- ④資料の字を見やすくしてほしい。/字はもっと大きください。
- ⑤比べて考えるのが大変。
- ⑥このクラスは言語だけ学ぶと思っていた。文化のクラスだと言った方がいい。
- ⑦遠足

<日本人学生の意見>

- ①留学生が各人で「実際に行ってみる」というのはむずかしいので、みんなで現場に出かけるというような試みがあれば、より興味が増したと思う。費用の面とか色々問題がありますが。
- ②きっかけ作りとして、体験もいれてはどうでしょうか。(例えば果物の出荷の様子を見に行くとか)
- ③もっと多くの留学生が取れるとよかったです。金曜の1限は留学生に対して負担? 2 or 3限くらいがよいと思う。/金曜1限より他の曜日の4限くらいの方が参加しやすいかもしれない。

- ④他県出身者に対する情報提供としても、教養の選択科目に入れて単位を与えられるようになればと思います。
- ⑤ボランティアで参加していることについて、同級生から「単位も出ないのにどうして参加するの」と不思議がられた。

自由記述の改善点をまとめると、次の4点が挙げられる。

- ①授業内容の宣伝
- ②開講曜日と時限の変更（1限以外）
- ③授業内容に関する体験活動、フィールドワークの導入
- ④資料の文字サイズと、ハンドアウトのサイズ（ハンドアウトはA3サイズを使用）

留学生が筆者個人に直接話してくれたことで、以下の課題もある。

- ①日本人学生の発話（教師と学生の発話の違い。文化・産業の言葉、方言は難しいため、易しく言い換えるよう意識化させる。）

留学生の受講生が少なかったことの原因として、今までにないタイプの授業を初めて開講したが、その授業内容に関する宣伝をほとんど行わなかったこと、金曜1時限目という開講時間が挙げられる。

岡山の文化・産業をより深く理解してもらうためには、授業の一環として受講生全員で授業内容に関する体験活動やフィールドワークも必要である。この点については課外活動時間や経済的な問題を検討しなければならない。

教師の発話は学習者の背景を考慮したコントロールされた日本語であるが、日本人学生の発話は「生」の日本語である。留学生と日本人学生の参加者が意味をやり取りするための適切なコミュニケーションスキルについて、簡単なガイドを示すといった工夫が必要だろう。

IV. おわりに

現在、多くの大学が国際的にも地域においても人々と連携し、大学独自の発信をしていくことが期待されている。山口県立大学では英語を介して地域文化遺産について学ぶ取り組み（やまぐちスタディーズ）が行われている（岩野他（2008））。「やまぐちスタディーズ」や、本稿で紹介した留学生が日本語を用

いて日本人学生とともに地域の文化・産業を学ぶ教育実践は、今後、地方大学がその特色を打ち出しながら短期交換留学生の受け入れを拡大していく上で一つのアピールになるかもしれない。

アンケート調査から、協働学習によるプロジェクトワークの実行が、留学生に日本語で目的を遂行することができるという達成感だけでなく、岡山の文化・産業に対する理解の深化を促し、さらには地域の人々との交流にもつながっていたことが明らかになった。日本語を使用する環境に身を置き、地方の生活の中で日本文化に接することを望んでいる留学生のニーズに応じていくためには、授業内容・形式についてさらなる検討と改善が必要である。

日本人学生との協働学習形式は残し、Ⅲ-2.節、Ⅲ-4.節で挙げた課題を解決しながら、留学生への負担が少ない形式で授業を展開していくことが重要だろう。

注

- (1) 受講生の活動中の表現やコミュニケーションスキルに問題があった場合、教師は適宜取り上げ、フィードバックを行うが、教師主導型ではなく補助的な教示が多い。
- (2) 留学生8名のうち、4名は壁新聞作成に負担を感じ、途中であきらめてしまった。
- (3) 壁新聞を全く作成しなかった留学生1名は質問15.～17.は無評価だった。日本人学生1名は第3～7回目の授業にすべて参加していないという理由から質問2.～9.および13.,14.,19.を無評価にしている。他の日本人学生1名も質問28.について「わからない」との理由から無評価にしている。無評価回答は【表4】の数値に含んでいない。
- (4) 2012年9月15日に石川県政記念しいのき迎賓館（金沢大学）で行われた日本語教育方法研究会にて根津誠先生よりコメントをいただいた。

付記

本稿は2012年9月15日に石川県政記念しいのき迎賓館（金沢大学）で行われた日本語教育方法研究会での発表内容を修正・加筆したものである。

引用文献

岩野雅子・シャルコフ ロバート・加藤禎行 『『やまぐちスタディーズ』構築に向けた試みー2007年度における教育実践ー』『山口県立大学国際文化学

部紀要』14, 山口県立大学, pp.126-133., 2008
中村和泉「岡山大学短期留学特別プログラム EPOK
ー' 04 アンケート調査結果に見る学生のニーズ
ー」『岡山大学留学生センター紀要』12, 岡山大学,
pp.59-73., 2005
バルダン田中幸子・猪崎保子・工藤節子『コミュニケー
ション重視の学習活動1 プロジェクトワーク』
凡人社, 1988

ヨーロッパ日本語教師会・独立行政法人国際交流
基金『ヨーロッパにおける日本語教育事情と
Common European Framework of Reference for
Languages』独立行政法人国際交流基金, 2005
吉島茂・大橋理枝他(訳・編)『外国語教育Ⅱ—外国
語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参
照枠』朝日出版社, 2004

Title: Establishing of a Local Study Program for Upper-intermediate and Pre-advanced Japanese Learners

Name: Yukako UCHIMARU (Language Education Center, Okayama University)

Keywords: local culture, local industry, project work, collaborative learning

Abstract: This is a practical study on a culture class for upper-intermediate and pre-advanced Japanese learners. We dealt with topics on local culture and industry in class, such as Japanese swords, Japanese fans, the textile industry, and farm and marine products. The class consisted of three groups of students: international, Japanese who minor in Japanese language education, and Japanese volunteers. We investigate how collaborative learning and the project work influenced the acquisition of content, and also illustrate some problems of the class based on the results of a survey.
